

佐伯経営区に於ける矮林の結構に就て

妻宮林看 下 平 仁

佐伯炭の産地として有名な佐伯地方は矮林が多い。佐伯経営区もその半分約3千町歩が矮林を以て白のられている。硬砂岩、頁岩を主とする急峻地であり皆伐期の皆伐の取扱いは土地再悪化を促進せしめるのみであり而も河川氾濫の虞あるこの地方としては矮林の取扱いは林業全済上のみならず治水上も重大な問題である。

矮林の皆伐は和歌山地方その他に於て優秀な成果を収めており矮林の取扱いとして推薦されている処であるが九州の如き常緑広葉樹の多い地方でも果して和歌山地方の取扱いが適するか否かは疑問であり若干の差異が生ずるは当然と思うがその取扱いは如何にあるべきかを探求したい為めに先づ結構について調査した。

調査は現在の10年生、20年生及び伐期に近いものにつき行つたがその結構は次の通りである。

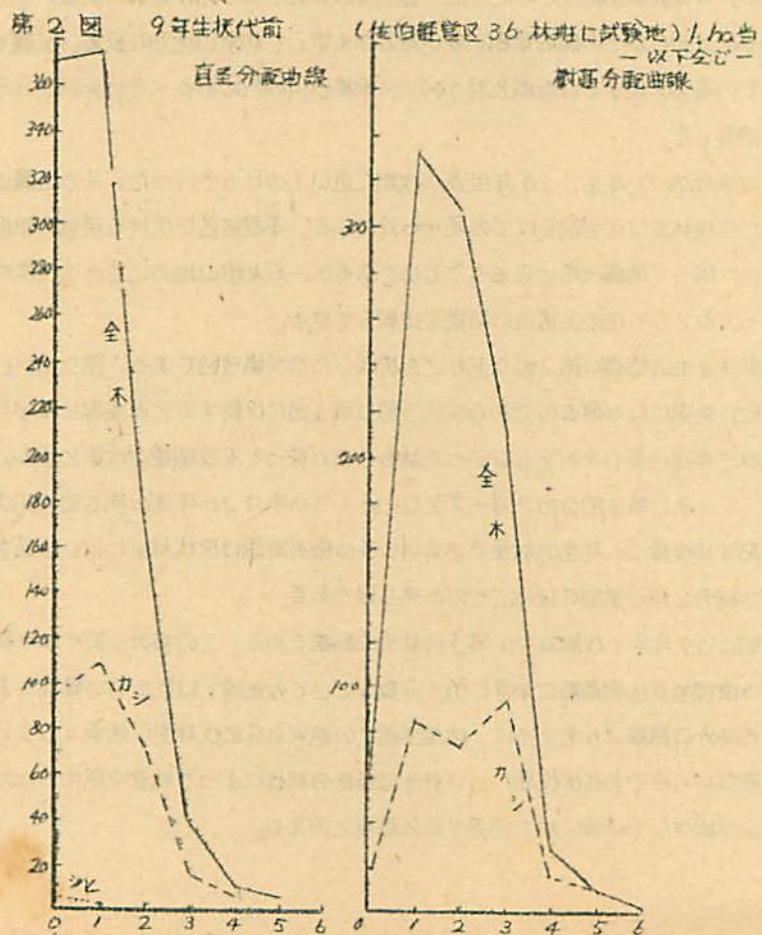
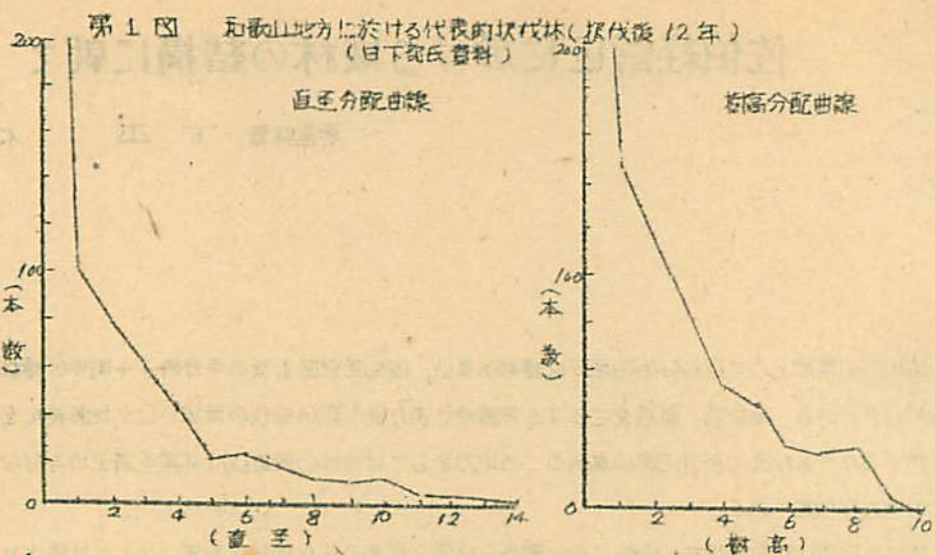
一般に皆伐林型は双曲線を以て想定せられている。本経営区に於ける矮林の理想的皆伐林型は今後の取扱いに依つて誘導決定せらるべきものであるが一応和歌山地方に於ける代表的な皆伐林型(第1図)をモデルとして佐伯経営区の結構と比較して見る。

皆伐後9年生の結構は第2図であり之を取扱したのが第3図である。第2図から誘導するならば第1図に近い曲線になり得るのであるが第3図は第1図と比較すると双曲線とは相当の懸隔がある。之は皆伐林で今一度も手入れをしなかつた林分であり従つて不良樹種の伐採と樹木の配置に主眼を置いて取扱した、めに第3図の如きカーブとなつた(この事は20年生の第5図も同様である)。

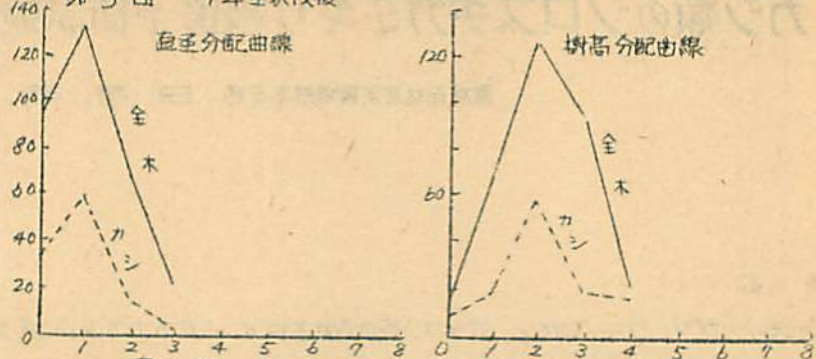
第4図は皆伐後20年生の林型であるが生長の優劣淘汰は皆伐林型に近い結構を示している。之を9年生の林分と同じ要領で取扱したのが第5図である。

第6図は27年生(伐期は30年)の林分の結構である。この林分に於ては小径木が著しく少く、本数は各直径階及び樹高階に平等に近く分散して双曲線とは甚だしい懸隔がある。

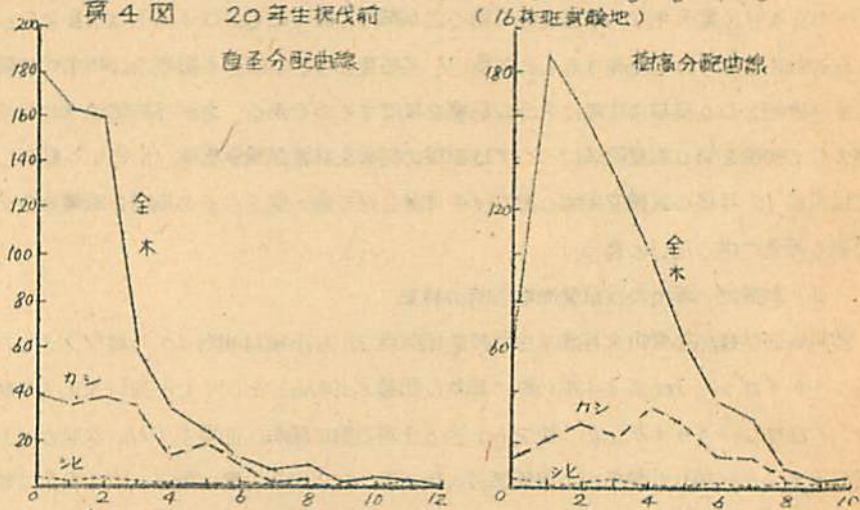
以上各林分の結構より考えるに、佐伯経営区の現実林を皆伐林型に誘導することは10年生及20年生程度までは可能であるが伐期に近い林分は重復の皆伐によつて稚樹を発生せしめぬ限り不可能であり、むしろ皆伐しその後を於て誘導するを再策と考える。



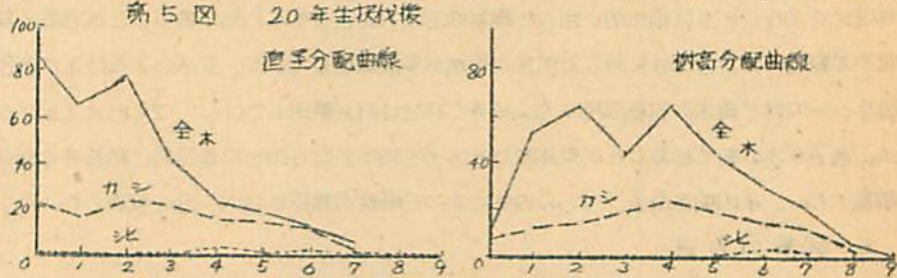
第3图 9年生伐後



第4图 20年生伐前



第5图 20年生伐後



第6图 27年生伐前

